

特集 廃刊・休刊相次ぐ中で――

道内地方紙の

生き残り策を讀む

夕刊66年の歴史に幕



▲この日が最後となった3月31日付の室蘭民報夕刊

新聞、雑誌などの紙媒体は斜陽産業といわれて久しい。なかでも新聞は、ネットニュースの普及、若者の活字離れ、広告収入の落ち込み等々、逆風ばかりの苦境に立たされている。朝毎読の全国紙はおろか、その朝毎読を凌駕する今年80周年を迎えた地元紙の雄・北海道新聞でさえ苦戦を強いられているのだから、地方紙の厳しさは改めて説明するまでもないだろう。1947（昭和22）年創刊の根室新聞の休刊から1年――地方紙の奮闘を探った。（フリーライター・内海達志）

新聞購読者が減り続けるなかにあつて、その象徴といえるのが「夕刊」だ。道新の販売店で勤務経験がある筆者の知人は、「昔と違い、朝夕刊セットの人は少ないです。月額600円の差ですが、それでも要らないと考える人が増えてい

新聞購読者が減り続けるなかにあつて、その象徴といえるのが「夕刊」だ。道新の販売店で勤務経験がある筆者の知人は、「昔と違い、朝夕刊セットの人は少ないです。月額600円の差ですが、それでも要らないと考える人が増えてい

るのでしょう」と話す。

3月31日付をもって、室蘭民報（以下、室民）の夕刊が休刊となった。室民は1945（昭和20）年12月8日の創刊夕刊は1956（昭和31）年8月1日から発行が始まった。日本新聞協会によると、県庁

所在地以外に本社を置く新聞社のうち、朝夕刊を発行していたのは、全国で室民だけだったという。昨年3月時点で、朝刊6万1210部（公称）に対し、夕刊は3万6460部と、ほぼ半数だった。室民の夕刊は、地元ネタのほか、外信や全国ニュースも充実していたのが特色だった。最終号で野田龍也代表取締役社長は「社会・生活様式、ネットなどメディア情報発信が進展しています。弊社も2020年4月に室民報電子版「Webむろみん」を創設、速報を中心に伝えております。こうした社会情勢を踏まえ「夕刊の役割は終わった」と判断しました」と結んでいる。

4月1日付朝刊からは、「第二の創業」と位置付け、統合版として紙面をワイドに一新

青地に白抜きだったおなじみの題字も、創刊初期の書体をモチーフにした黒文字にするなど、生まれ変わった室民をアピールした。この題字変更については、「社を築き上げた諸先輩方の功績に敬意を表し、また第1号の見出し「待望の新聞誕生す」と喜んでいただいた読者の皆さまに継続して愛される新聞でありたい――と願いを込めています」と説明している。

近年、ブームとなっている「ふるさと納税」。その返礼品に地方紙を届ける自治体が増えているという。こうした動きは6年前から始まったそうで、全国20以上の自治体の実施しており、北海道では室民と苫小牧民報が対象となっている。室蘭、苫小牧出身者にとっては、懐かしい故郷の話題に触れられる斬新な取り組みといえよう。多くの自治体に広がることを期待したい。

根室新聞の伝統を継承

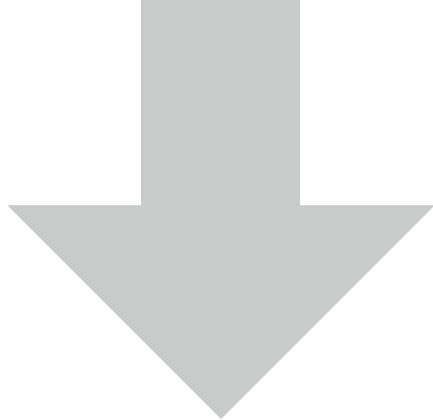
1年前、根室新聞が休刊する以前も、北海道では2000年以降だけで北見新聞、網走新聞（その後、網走タイムズが誕生）、斜里



▲デザインを一新した4月1日付の室蘭民報



▲1年前に休刊となった根室新聞



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)